

春分儀式

I O S 儀式魔術文書 V E 2 0 0 1

- | | |
|-------|-------------------|
| 第 1 章 | 解 説 |
| 1 | 司官の配置 |
| 2 | 儀式場の準備 |
| 第 2 章 | 神殿聖別儀式 |
| | L B R P / L B R H |
| | 浄化 / 聖別 |
| | 神の姿形の設定 |
| | 四門の開放 / 四壁の設定 |
| | 竜の周行 |
| | 神殿設定の宣言 |
| 第 3 章 | 春分の祝祭 |
| | 諸神の召喚 |
| | パスワード交換 |
| | ヘルメスの旅 |
| | 聖 餐 |
| | 宇宙の主の讃歌 |
| 第 4 章 | 神殿の閉鎖 |
| | 浄化 / 聖別 |
| | 諸神への賛辞 |
| | 竜の逆周行 |
| | 四壁の開放 / 四門の閉鎖 |
| | 四方位の閉鎖 |
| | L B R P / L B R H |

THE OFFICIAL ORGAN
OF

I O S

PUBLICATION IN CLASS D
IMPRIMATUR : M FRATER I O S

THE SPRING EQUINOX CEREMONY FOR GROUP WORKING
I O S RITUAL MAGIC WORKING

第 1 章 解 説

本儀式は、小規模な団内グループ(ロッジ単位程度)が比較的簡易な準備で行えることを前提に作成した。従って、《黄金の夜明け》団などで執拗なまでに追求された儀式のシンメトリーや細部の精密さに欠ける部分があるかもしれない。しかし、本儀式においては、豊潤な虚飾より実践的簡潔さを、正確で冗長な記述より、瞬間の真実と実効性を追求した。

《春秋分点》は、「均衡と調和」を表象する宇宙的な時刻である。年に2回の分点において、太陽の運行または振動と地上の四大元素が融合する。本儀式は春分点の前後48時間以内に実施すること。本儀式では、立体天球の北極を取り巻く《大いなる竜》の力を召喚する。従って儀式の最初と最後にハイエロファントは、自己の責任で小五芒星及び小六芒星の追儼儀式を行わねばならない。

なお、「生まれなき者」の儀式の本文に挿入された意味不明の言葉は、P G M 断章475以降、いわゆる『ミトラ祈祷書』による<秘密の神名>または<野蛮なる名前>(nomina barbara)である。ギリシャ語原文では、簡便な発音を提供しづらいため英文等価表記を変形して用いている。大文字は単発音、小文字は長発音を示す。例えば、ハイエロファントが発音するホルス神の隠れた名前「o R R E o R o R I E o R E o R E o R E」は、日本語表記では、「オール レオーロオーリ エオール エオール エオーレ」となる。これをそのままカタカナ読みしたのでは、豊饒も何もない。秘密の名前の力の幾分かは、その震動にある。かの『カルデア神託』に曰く。「<野蛮なる名前>を変えることなかれ。これらは神よりその民に下されし名前にして、参入の秘儀において口にすべからざる力を有するがゆえなり。」(ウェストコット版155節、マジエリック版150節 原典はプセルス)心して発音されたい。

2001年 春分儀式の細部

- 1 日 時
2001年3月24日(土) 1800~2100
(スタッフ集合: 1730 受付開始: 1800)
- 2 場 所
関区民センター 3F 視聴覚室
(東京都練馬区北1丁目7番2号 Tel 3928-3046
西部新宿線<武蔵関>駅「南口」下車 徒歩10分)
- 3 参加者
(1) 参加者
I O S 団員及びP Sの希望者
(2) 主な司官予定者
H t : M E S A H r : A F H g : A C N S t : V P P E P
D d : W O F K x : A S M P t : T P A
- 4 服 装
黒の法衣(P S参加者で法衣が準備できない場合は黒の上下)
- 5 参加費用
3000円

1 司官の配置

本儀式に必要な最低の人数は2人である。極論すれば、ハイエロファントとハイエールスがいれば儀式は実行できる。しかし、円滑な儀式の執行を考慮した場合は、それ以上の司官が必要となる。四方位の守護者をヘゲモンらが兼た場合は6~8名、完全な儀式を行う場合は、14名必要である。

最も大切なのは、ハイエロファント(ハイエロファントリア)、ハイエレイア(ハイエールス)及びヘゲモン(ヘゲモーネ)の選定である。

次に述べるのは、《神殿聖別儀式》の司官に充当する人物の理想像である。作業を主催する仲間の数が少ない場合は、性格の適合どころか、男女の別さえ該当する司官を集められない場合があるだろう。そのときは適宜、最良の選択をするように心がけなさい。また、司官は固定せずに半年かそこらで配置換えをするのが望ましい。この配置換えを定期的に行って、ハイエロファント、ハイエレイア、ヘゲモンの配置が、数年たてば訓練を受けた全員に回るよう配慮する必要がある。

可能ならば、法衣を纏う。通常は、位階の指定色、《黄金の夜明け》では第1団は黒、第2団は白であるが、特殊な神殿を用いる場合はこの限りではない。

《ハイエロファント＝渦＝ホルス神》

男性が望ましいと言われるが、次の条件を満たせば男女どちらでも良い。かれは作業の場における人間及び非・人間双方の霊的要素を制する能力が要求される。それ故に活動的で大胆な性格が要求される。一例として言えば、肉体的に強壮で外向的な人間が相応しいだろう。この司官は儀式の指導的役割を果たし、動き回り、少しも憶することなく指示を出さねばならない。

《ハイエレイア＝水・闇＝イシス女神》

基本的に女性である。四大の水と、太陽の沈む西を表象するハイエレイアは、豊かな大洋のごとき豊饒さと、荒れ狂う嵐の海の猛々しさを併せ持つ複雑な人格が望ましい。体内の奥深くに闇を宿すが、やがてそれは再生の光に変容する。

《ヘゲモン＝風・光＝オシリス神》

基本的に男性である。四大の風と、太陽の昇る東を表彰するヘゲモンは、颯爽と動く活動かであり、若々しく復活後の不死のオシリスを表象している。

《ケルックス＝東のアヌビス神》

かれは神々の伝令として、門の前と後に控える。かれは両界の遊歩者にして、観察者であり、ときには審判者でもある。

《ストリステス＝地＝ネフシス女神》

女性が望ましい。四大の地と、タットワの《計画と破壊の潮》を表象するストリステスは、不動の大地の安定さと、潜在的な再生力を体現する存在である。

《ダドウコス＝火＝セト神》

男性が望ましい。四大の火と、タットワの《撒種と収穫の潮》を表象するダドウコスは、全てを焼き尽くし滅ぼす火のなかの活動力と、神秘性を体現する存在である。

《ケルックス＝西のアヌビス神》

かれは強い意志をもって作業場の入り口を護る。その原型は、エデンの入り口を警護する燃える剣をもつケルビムである。

《東の聖獣の守護者＝ラー神》

東は「調和と癒しの門」である。この性質を体現した人物を当てるべきだ。バランスの取れた人格をもち、他人の痛みに敏感な者が良い。可視の場は、夜明けの太陽ラー神を背負うので、滲刺とした清々しい人物像も求められる。

《南の聖獣の守護者＝アハトール神》

南は「愛と勇気の門」である。この性質を体現した人物を当てるべきだ。理想的には、無鉄砲さとは無縁な寡黙なタイプの勇気を持ち、人種や国籍、信条に偏見を覚えない静かに溢れ出すような愛を持つ人物が良い。火の蛇をうちに宿した人物を探すこと。可視の場は、真昼の太陽アハトール神である。

《西の聖獣の守護者＝トゥーム神》

西は「力の門」及び直観的な「内的知識」への扉である。同時に四大のうち水の間でもあるので、月の力を引き寄せる女性が相応しい。彼女は感受性が強く、想像力に溢れ、視覚化に秀でた人物であるべきだが、支配欲の強い人物は相応しくない。可視の場は、日没の太陽トゥーム神であり、豪華な残光をたなびかせている。

《北の聖獣の守護者＝ケペラ神》

北は大自然と惑星の諸力について、強い共感を覚える人物になるべきだ。年経るごとに死と復活を体現し、忍耐強い人物を選ぶ。可視の場は真夜中の太陽ケペラ神であり、地底の不可視の軌道においてなお力強く躍動している。

《儀典司官＝トート神》

儀式文書を携え、儀式の節目に発言し、不測の事態に当たっては司官及び参加者を誘導する。その役目は儀典官(Protocolor)、後見人(Prompter)、先唱者(Precentor)とも呼ばれるが、正式には儀典司官(Protomysta)である。

第2章 神殿聖別儀式

1 神殿の設定

参加者は別室で法衣を着用する。(状況により平服で行う場合は、なるべく黒または白系統の模様のないシンプルな服装を用意する。長袖、長パンツ、ロングスカート等のなるべく肉体を覆い隠すものが良い。しかし、奇をてらってはいけない。)

法衣の着用が終了したら、沈黙し儀式の背後にある意味を黙想しつつ待つ。

ハイエロファント(H t)が最初に入場し、次の準備を行う。

小五芒星の追儼儀式

祭壇の西に東を面して立ち、カバラ十字を切る。

「Tu es Regnum et Potentia et Gloria in saecula saeculorum, Amen」

東に行き地の追儼の五芒星を描く。

「Per Adonai Jehova Ex Oriente Lucem Orbis」

南に行き地の追儼の五芒星を描く。

「Per Adonai Sabaoth Ad Majorem Dei Gloriam」

西に行き地の追儼の五芒星を描く。

「Per Adonai Elohim In Hoc Signo Vinctes」

北に行き地の追儼の五芒星を描く。

「Per Agla Methon Omnia Cum Sancto Sanctorum」

東に行き円を完成させ、右回りで祭壇の西に戻り、東に面する。

両手を左右に広げ、大天使を活性化させる。

「Prae Raphael, pone Gabriel, ad pares Michael, a sinistra Auriel
Cenventus Sylvorum, Verbum Pythonicum, Mysterium Salamandrae,
Antra Gnomorum」

「Accendat Pentagram circum, splendere Hexagram in columna」

カバラ十字を切る。

「Tu es Regnum et Potentia et Gloria in saecula saeculorum, Amen」

小六芒星の追儼儀式

中央でL V Xのサインを行う。

東に行き土星の追儼のユニカーサル・ヘキサグラムを描く。

「PATER ET MATER UNUS DEUS ARARITA」

南に行き土星の追儼のユニカーサル・ヘキサグラムを描く。

「MATER ET FILIUS UNUS DEUS ARARITA」

西に行き土星の追儼のユニカーサル・ヘキサグラムを描く。

「FILIUS ET FILIA UNUS DEUS ARARITA」

北に行き土星の追儼のユニカーサル・ヘキサグラムを描く。

「FILIA ET PATER UNUS DEUS ARARITA」

中央に戻り、薔薇十字を描く。

「ARARITA ARARITA ARARITA」

トライデントのサイン、引き続き両手を王冠に添え、大地に落とす。

「OMINA IN DUOS DUO IN UNUS UNUS IN NIHIL :

HAEC NEC QUATUOR NEC OMNIA NEC DUO NEC UNUS NEC NIHIL SUNT.」

「GLORIA PATRI ET MATRI ET FILIO ET FILIAE ET SPIRITUI SANCTO EXTERNO ET
SPIRITUI SANCTO INTERNO UT ERAT EST ERIT IN SAECULA SAECULORUM
SEX IN UNO PER NOMEN SEPTEM IN UNO ARARITA.」

L V Xサインを行う。

東の玉座に座り、呼吸と中央の柱で魔法鏡を活性化したのち、神殿の境界までオーラを拡張し、神殿を黄金の光で満たす。

これらが完全に成し遂げられたら、合図の鈴(銅鑼)を鳴らす。

ケルックスは、扉の外側で神殿を守護している。H tの鈴の合図の鈴(銅鑼)で入室を開始する。最初にケルックス(K x)が入室して左側に立つ。他の司官及び参加者は、この二人の間をくぐり、ヘゲモン(H g)、ダドウコス(D d)、ハイエレイア(H r)、ストリステス(S t)、儀典司官(P t)、東の守護者(E G)、南の守護者(S G)、西の守護者(W G)、北の守護者(N G)、その他の参加者(東南西北側)の順で入室する。

それぞれは入室する際にケルックスに剣を突きつけられ、ケルックスの耳にロッジのパスワードを囁かねばならない。ケルックスは正しいパスワードを聞いたなら頷いて、先に行かせる。ケルックスは参加者の人数を確認する。

H t : 「ケルックスよ、全ての者が正しいパスワードで応じたか。」

K x : 「全てパスワードを告げし者なり。神殿の首領よ。」

H t : 「ケルックスよ、参集すべき者は集まりしか。」

K x : 「呼集されし者すべて集いたり。神殿の首領よ。」

祭壇の西に立ち東を向いて言う。

H t : 「ヘカス ヘカス エステ ベベロイ I O S アドヴェンナ・ロッジの兄弟姉妹たちよ。この作業の場に、上位の神殿への接点となる地上の神殿を建立せんがため、われらは集いたり。ロッジの神殿を開設するため兄弟姉妹の力と形を結集せん。」

P t : 「水と火の浄化」

H t : 「ストリステスよ、神殿を水で浄化せよ。」

S t は、補助祭壇のゴブレットを取り上げ、東から始めて南、西、北と神殿の四方にゴブレットの塩水を滴らせる。そのやり方は最初、右手の三本の指を浸し、壁に向かい3回振った後に、その場で右回りに回転し祭壇の方に3回振る。指を動かす軌跡が、それぞれ三角形を構成するように行う。北でこの動作を終了した後、東を通過して反転し自分の座に戻り、ゴブレットを戻した後に、宣言する。

S t : 「神殿を水で浄化した。」

H t : 「ダドウコスよ、神殿を火で聖別せよ。」

D d は、補助祭壇の香炉を取り上げ、東から始めて南、西、北と神殿の四方を香炉で薫蒸する。そのやり方は最初、壁に向かい3回振り込んだ後に、その場で右回りに回転し祭壇の方に3回振り込む。香炉を動かす軌跡が、それぞれ三角形を構成するように行う。北でこの動作を終了した後、東を通過して自分の座に戻り、香炉を戻した後に、宣言する。

D d : 「神殿を火で聖別した。」

H t : 「場をもちたる者は、その姿形を纏うべし。」

H t は顔のないアケファロスの姿形をまとう。各司官は自分の《可視の場》に相応するエジプト神の姿形を纏う準備を行う。すなわち背後に視覚化した神の巨大な像を維持する。

各方位の守護者は、対応するケルプの神聖獣の姿形を纏う。各司官の姿形を確認した後、H t はその姿形を空間に焼き付ける。

H t は祭壇の方を向いて、《ヴェールを開く》合図を行う。その後、祭壇の剣を取上げ、東に面する。

H t は東に行き、座したH g の前に立ち、剣を垂直に捧げ持ちながら、その柄を額に当て、神聖名「I H V H」を振動させる。同時に白輝光を天空から引き寄せ、自らのケテルを通してティファレットに引き入れる。

H t は剣の柄を胸の位置に移し、神名「A S R」を白い火文字でティファレットの上に刻印する。そののち、「A S R」を三回振動させる。一回目は自分のなかで、二回目は剣の刃を倒し、H g の胸に当てながら自分とH g の内部で、三回目はH g のなかだけで振動させる。

H t は「Communicantes」と唱えながら自分のティファレットにA S Rの薔薇十字のシギルを形成し、「et Diem Sacratissimum」と唱えながらH g のティファレットに投射し、H g の背後の神の像を強く引き寄せ、「Celebrantes Forma Diem」と唱えながらオシリスの神の姿形をH g に重ね合わせる。

これらの手順は、H t とH g の共同作業である。H g はH t の誘導に従い、一連の伝達を強く視覚化しなさい。両者を結ぶエーテル的なリンクを通じて、H t の魔術的意志が流れ込み、H g の魔術的意志と融合し、強固な姿形を創造するように努力せよ。

同じ形成を、次の順序で行う。

D d : 「A D N I」
「S h I T h」

H r : 「 A H I H 」
「 A S T h 」

S t : 「 A G L A 」
「 N B T 」

K x、P t 及び四聖獣の守護者たちは、その間に自力で神の姿形を纏う。

P t : 「^{しもん}四門の開放と^{しへき}四壁の設定。
参列者は祭壇を向いてお座り下さい。」

全員が祭壇の方を向く。H t は、H g に命ずる。
H t : 「ヘゲモンよ、風の門を開き、神殿の東壁を設定せよ。」

H g は力の剣をもち、北東に行き、神殿の東の壁沿いにそれを水平に走らす。東側に座る参加者の前を横切るときは、剣で肩に触れていく。ただし、《牡牛》と《人間》の守護者に触れてはならない。再び、東の中央に戻り、エノク語とヘブル語の名前を振動させながら、剣で、それぞれの五芒星とサインを描く。

H g : 「 E X A R P 」 「 A H I H 」
霊の均衡能動の召喚の五芒星を描き霊のサインを入れる。

H g : 「 O R O I B A H A O Z P I 」 「 I H V H 」
風の召喚の五芒星を描き、中央に宝瓶宮のサインを入れる。

H g は祭壇に向き直り、H t に告げた後、剣を額に押し当てる。
H g : 「風の門を開き、神殿の東壁を設定した。」

H t は、H g の返事を確認した後、D d に命ずる。
H t : 「かくあれかし。ダドウコスよ、火の門を開き、神殿の南壁を設定せよ。」

D d は祭壇から杖（剣）を取り、南東に行き、神殿の南の壁沿いにそれを水平に走らす。南側に座る参加者の前を横切るときは、杖（剣）でその肩に軽く触れる。ただし、《人間》と《獅子》の守護者に触れてはならない。再び、南の中央に戻り、エノク語とヘブル語の名前を振動させながら、杖（剣）で、それぞれの五芒星とサインを描く。

D d : 「 B I T O M 」 「 A H I H 」
霊の均衡能動の召喚の五芒星を描き霊のサインを入れる。

D d : 「 O I P T E A A P E D O C E 」 「 A L H I M 」
火の召喚の五芒星を描き、中央に獅子宮のサインを入れる。

D d は祭壇の西に戻りH t に告げた後、杖（剣）を額に押し当て祭壇に戻す。
D d : 「火の門を開き、神殿の南壁を設定した。」

H t は、D d の返事を確認した後、H r に命ずる。
H t : 「かくあれかし。ハイエレシアよ、水の門を開き、神殿の西壁を設定せよ。」

H r は祭壇から盃を取り、南西に行き、神殿の西の壁沿いにそれを水平に走らす。西側に座る参加者の前を横切るときは、盃に右手の指を浸し、額に液体をつける。ただし、《獅子》と《鷲》の守護者に触れてはならない。再び、西の中央に戻り、エノク語とヘブル語の名前を振動させながら、盃でそれぞれの五芒星とサインを描く。

H r : 「 H C O M A 」 「 A G L A 」
霊の均衡受動の召喚の五芒星を描き霊のサインを入れる。
H r : 「 E M P E H A R S E L G A I O L 」 「 A L 」
水の召喚の五芒星を描き、中央に天蠍宮のサインを入れる。

H r は祭壇の西に戻りH t に告げた後、盃からひとくち飲み祭壇に戻す。

H r : 「水の門を開き、神殿の西壁を設定した。」

H t は、H r の返事を確認した後、S t に命ずる。

H t : 「かくあれかし。ストリステスよ、地の門を開き、神殿の北壁を設定せよ。」

S t は塩皿をもち、北西に行き、神殿の北の壁沿いにそれを水平に走らす。北側に座る参加者の前を横切るときは、皿の塩をひとつまみ額に降りかける。ただし、《鷲》と《牡牛》の守護者に触れてはならない。再び、北の中央に戻り、エノク語とヘブル語の名前を振動させながら、皿で、それぞれの五芒星とサインを描く。

S t : 「N A N T A」「A G L A」

霊の均衡受動の召喚の五芒星を描き霊のサインを入れる。

S t : 「E M O R D I A L H E C T E G A」「A D N I」

地の召喚の五芒星を描き、中央に金牛宮のサインを入れる。

S t は祭壇の西に戻りH t に告げた後、皿の塩をひとつまみ口に入れ祭壇に戻る。

S t : 「地の門を開き、神殿の北壁を設定した。」

H t は、S t の返事を確認する。

H t : 「かくあれかし」

H t : 「四門は開放された。神秘なる周行を光と闇の小径に起こすべし。」

P t : 「竜の周行。」

この神秘なる《竜の周行》により、上空から光の渦が、下方から闇の渦が召喚され、祭壇を縦軸として、神殿全体を光と闇の二重螺旋のなかに包み込む。」

H g が最初に右回りに動き始める。D d、H r、S t が追う。

神殿の東を通過するとき《ホルスのサイン》を円周上になし、H g は1回、D d は2回、H r とS t は3回通過した後、自分の場に戻る。

H t : 「神秘なる周行は完成し、天の竜は降下せり。」

H t は祭壇の西に行き、東を向いて立つ。

H t : 「われは宣言する。I O S アドヴェンナ・ロッジの神殿は設定された。」

第3章 春分の祝祭

H t : 「われら春分点を祝祭せん。」

P t : 「諸神の召喚」

H t は東に面する。

H t : 「ここに《生まれなき》者を召喚せん」

H t : 「われ汝を召喚す、アケファロスよ。

汝、地と天を造りし者よ。

汝、昼と夜を造りし者よ。

汝、闇と光を造りし者よ。

汝は、R A - H R V - K T H I、完全者たるわれなり、何人もかって目にせぬ者なり。

汝は、イア ベズ ペー。

汝は、イア アボフラッツ ヨド。

汝は、正と不正を分かちたる。

汝は、女と男を造りたる。

汝は、種と果実を生みたる。

汝は、人を互いに愛しあい、憎みあうべく造りたる。」

H t : 「われはB G D。汝の密儀、すなわち光と闇の魔術を託されし、汝の予言者なり。

汝、湿と乾をあらわし、すべての生命を造り、育み、滅ぼすものなり。

汝、わが声を聞くべし。われは、無垢なる蒼穹の天使なればなり。

こは、汝の預言者につけられし名前なり。」

H g は東を向いて立ち、東の神殿の壁の彼方に聳え立つ巨大なオシリス神の立像を視覚化する。意識の焦点を神の目に向け、精神で神のオーラに接触する。

H g : 「わが声を聞け、A S - A R よ！

汝、恐るべき不可視の神よ。

汝、霊の虚の場所に住まう者よ。

汝は、人の姿を取りし蛇なり。

汝は、宇宙を調停する者なり。

わが声を聞け、

A E e I O Y o P P P S S S M M M

(アエーイオヨォー プブブ(唇を震わせて破裂音)

ススス(歯の隙間から歯擦音) ムムム(唇を閉じて震動させる))

わが声を聞け、そしてすべての霊をわれに従わしめよ。

されば、すべての蒼穹の霊、エーテルの霊、地の上の霊、地の下、

陸の霊、海の霊、渦巻く風の霊、逆巻く炎の霊、神のあらゆる呪詛と懲罰を、

われに服従せしめん。」

D d は南を向いて立ち、南の神殿の壁の彼方に聳え立つ巨大なセト=テュフォーン神の立像を視覚化する。意識の焦点を神の目に向け、精神で神のオーラに接触する。

D d : 「わが声を聞け、A P V - P R S h !

汝、恐るべき不可視の神よ。

汝、霊の虚の場所に住まう者よ。

汝は、否定する霊なり。

汝は、真夜中の天空なり。

わが声を聞け、

E Y e Y I A E e I A o E I A Y I Y A I E o

(エイエー イエイア エーイ アォー エイアイエ イイエア イエォー)

わが声を聞け、そしてすべての霊をわれに従わしめよ。

されば、すべての蒼穹の霊、エーテルの霊、地の上の霊、地の下、

陸の霊、海の霊、渦巻く風の霊、逆巻く炎の霊、神のあらゆる呪詛と懲罰を、

われに服従せしめん。」

H r は西を向いて立ち、西の神殿の壁の彼方に聳え立つ巨大なイシス女神の立像を視覚化する。意識の焦点を女神の目に向け、精神で神のオーラに接触する。

H r : 「わが声を聞け、A S T h - R N N V T h !

汝、恐るべき不可視の神よ。
汝、霊の虚の場所に住まう者よ。
汝は、宇宙の母なり。
汝は、全き闇なり。
わが声を聞け、
o e Y A E o e Y A E o e Y A E o I A E
(オーエーイ アエオー エーイェア エオーエー イェアエ オーイアエ)
わが声を聞け、そしてすべての霊をわれに従わしめよ。
されば、すべての蒼穹の霊、エーテルの霊、地の上の霊、地の下の霊、
陸の霊、海の霊、渦巻く風の霊、逆巻く炎の霊、神のあらゆる呪詛と懲罰を、
われに服従せしめん。」

S t は北を向いて立ち、北の神殿の壁の彼方に聳え立つ巨大なネフシス女神の立像を視覚化する。意識の焦点を女神の目に向け、精神で神のオーラに接触する。

S t : 「わが声を聞け、N B T - H T I !
汝、恐るべき不可視の神よ。
汝、霊の虚の場所に住まう者よ。
汝は、闇を領する新月の女神なり。
汝は、高みを駈ける黒き骨なり。
わが声を聞け、
I E I A e E e O Y E I A
(イエ イア エーエー オ イェ エイア)
わが声を聞け、そしてすべての霊をわれに従わしめよ。
されば、すべての蒼穹の霊、エーテルの霊、地の上の霊、地の下の霊、
陸の霊、海の霊、渦巻く風の霊、逆巻く炎の霊、神のあらゆる呪詛と懲罰を、
われに服従せしめん。」

H t は祭壇の西から東に面して両手を広げ祭壇に主神を召喚する。
H t : 「われ、汝を召喚す、生まれなき者よ！

汝、恐るべき不可視の神よ。
汝、霊の虚の場所に住まう者よ。
汝は、V R - H R V、古き天帝なり。
汝は、R A - H R V - K T H I、真昼の太陽なり。
汝は、H R V - P A - K R A T h、無垢なる幼子なり。
汝は、生まれなき者にして、宇宙の守護者なり。
わが声を聞け、
E o R o R o R E o R R I o R I o R R o R R o I
(エオーロオー ロオーレ オーリリ オーリオル ロオール ロオーイ)
わが声を聞け、そしてすべての霊をわれに従わしめよ。
されば、すべての蒼穹の霊、エーテルの霊、地の上の霊、地の下の霊、
陸の霊、海の霊、渦巻く風の霊、逆巻く炎の霊、神のあらゆる呪詛と懲罰を、
われに服従せしめん。」

H g : 「これは神々の主なり。
これは宇宙の主なり。
これは風の恐れる者なり。
これはその命により声を造りし、万物と無の支配者なり。」

H t : 「わが声を聞け、そしてすべての霊をわれに従わしめよ。
されば、すべての蒼穹の霊、エーテルの霊、地の上の霊、地の下の霊、
陸の霊、海の霊、渦巻く風の霊、逆巻く炎の霊、神のあらゆる呪詛と懲罰を、
われに服従せしめん。」

H r : 「われは汝のもとに行かず、汝がわがもとに来たれり。
星と、夜と、稲妻の彩る空間に、
汝がいずこをさまようとも、常にわがもとに帰り来たり。
われは天の空虚に住まえり。
汝がこの座所を訪れしとき、汝はまさに知る。
炎と煙の柱をとおして、汝は上り、また下りぬ。
不死鳥のごとく、翼は焼かれ、また蘇る。」

そは汝の眞実の名なり。」

H t : 「われはかれなり、生まれなき者なり。足元に目をもつ者なり。
強大にして不滅の火なり。
われはかれなり、眞実なり。
われはかれなり、世界に悪のはびこるを厭う者なり。
われはかれなり、稻妻を發し、雷鳴を轟かす。
われはかれなり、地に生命の雨を降らしたり。
われはかれなり、口より火を發する者なり。
われはかれなり、子を造り、光へと顯現する者なり。
われはかれなり、世界の恩寵なり。
o R R E o R o R I E o R E o R E o R E
(オール レオーロオーリ エオール エオール エオーレ)
こは、わが名前なり。
汝、来たりてわれに従い、すべての靈をわれに服従せしめよ。
されば、すべての蒼穹の靈、エーテルの靈、地の上の靈、地の下の靈、
陸の靈、海の靈、渦巻く風の靈、逆巻く炎の靈、神のあらゆる呪詛と懲罰を、
われに服従せしめん。イアオ、サバオ。かくのごとき言葉なり。」

P t : 「内なる神殿に《三重に偉大なる神》は降臨せり。
春分は到来せり、宇宙の主を讃えん。」

H g : 「宇宙の主を讃えん。
聖なるかな、汝、風の主よ。
蒼穹を創りしものよ、来たりて春分を祝せよ。」

D d : 「宇宙の主を讃えん。
聖なるかな、汝、火の主よ。
栄光の座を示すものよ、来たりて春分を祝せよ。」

H r : 「宇宙の主を讃えん。
聖なるかな、汝、水の主よ。
創造のとき深淵の面を歩きしものよ、来たりて春分を祝せよ。」

S t : 「宇宙の主を讃えん。
聖なるかな、汝、地の主よ。
自ら座すべき大地を造りしものよ、来たりて春分を祝せよ。」

H t : 「宇宙の主を讃えん。
聖なるかな、汝、万物を生みしものよ。
森羅万象は、汝のなかにあり、
わが右手を天に伸ばせば、そこに汝あり、(右手を上)
わが左手を冥府に伸ばせば、そこにも汝あり、(左手を下)
わが腕を組めば、そこにも汝あり。(腕を組む)
汝のものは、躍動する《風》なり。(東面)
汝のものは、燃える炎の《火》なり。(南面)
汝のものは、満ち引きする《水》なり。(西面)
汝のものは、堪え忍び定まる《地》なり。(北面)
わが心臓の光輪は回転せり、来たりて春分を祝せよ。」

S t : 「I I I I I I I I」 - - - H t : 「I E R E Z A T H」
D d : 「A A A A A A A A」 - - - H t : 「A N C H R E P H R E N E S O U P H I R I G C H」
H r : 「O O O O O O O O」 - - - H t : 「O I M E N A R C H O M A I」
H g : 「I I I I I I I I A A A A A A A O O O O O O O」

P t : 「宇宙の主の賛歌は終了せり。聞け、神殿のうからよ。」

H t は祭壇の東に周り、西を向く。

H t : 「春分は来たれり。昼と夜は均衡せり。」

H t : 「深き闇に拝礼す。」ホルスのサイン

H r : 「犬狼星の輝きは去れり、数多の母なる神々は退き、大いなる子の時代が訪れん。」

H t : 「AVE FIRMAMENTUM TERRENUM PER TESSERAM MAGNA・・・」
鈴を6回鳴らす。

H t : 「全き光に拝礼す。」ハーボクラテスのサイン

H g : 「墓所の柱は切り倒されぬ、生と死は等価ならん。

H t : 「AVE FIRMAMENTUM COELESTEM PER TESSERAM MAGNA・・・」
鈴を6回鳴らす。

P t : 「パスワードは交換された。ハーボクラテスの世が始まらん。」

H t は祭壇から離れ、東に行く。

それぞれの方位の壁に面したH r、S t、D dの三司官は佇立したまま、神殿を囲む魔法円を青白い炎の円環として視角化し、その魔法円に意識と意志を投射して、炎を激しく燃え盛らせ、神殿内部が完全な結界として存在するように強化せよ。(四大の門はそのまま)

H gは、炎の魔法円の東端に「風の門」を強く視覚化し、そこから熱く湿った風のイメージが吹き込む様子を、意識と意志を総動員して誘導せよ。神殿の内部を軽快な風の霊気が渦を巻いて疾駆する有り様を感じなさい。

H t は東を向いて跪拝する。

H t : 「かそけき薄明の水平線より黄金の光が訪わん。」

P t : 「司官を除く参列者は東を向いて目を閉じて下さい。

そして、身体のを抜き、ゆっくりと呼吸して下さい。

東の方角に真暗な水平線をイメージします。見渡す限り島影も、沖の漁り火も見えず、ただひたすら風の海面がゆったりと広がる大海原を強く想像して下さい。身体のを抜いて、イメージの世界に身をゆだねて下さい。

ぼんやりとした黒い帯にしか見えない水平線の上には、雲ひとつない透明な夜空のスクリーンに数え切れないほどの星が輝いています。左の水平線から右の天頂付近まで、かすかな白い粉を蒔いたような光の帯が闇夜を横切っています。それはミルキーウェイともよばれる銀河、天の川です。

(しばしの沈黙・・・)

あなたの左手の方角に意識を向けて下さい。左の濃い闇のなかには、北方の巨大な山脈に守られた聖なる頂があります。幾重にも折り重なる山々の背後に、ひときわ高く聳える山の頂に、人間の存在しない神殿があります。地の霊に守られた神殿は、雪を頂く白い山肌の頂上付近にあり、凍結した岩盤に直接彫り込まれています。そこは北の門、ザホンと呼ばれる神々の集会場でした。神殿は古への神々の座でもあります。今は古き神々が訪れることもなく無住の神殿となった岩穴の大広間には、人間の背丈よりも高い黒い玄武岩の祭壇があり、白い骨のようなものが供えてあります。それは地の塩です。錬金術の3原理のうち、灰のなかに潜むもの、大地の不動の性質の根源、結晶する鉱物の種、神の不变の英知を表すものです。地の塩は濃い闇のなかで自ら光を発することく、白い宝石の粉のように輝いています。

(しばしの沈黙・・・)

次にあなたの右手の方角に意識を向けて下さい。右の濃い闇のなかには、南方の広大な砂丘が広がっています。乾いた砂がゆっくりと動く砂丘のなかには、埋没した金属の神殿があり、熱をもった純鉄の塔が砂の上に先端を見せています。古の神々が特別な目的のために建立した金属製の神殿は、もとより人間の訪れる場所ではなく、炎熱を糧とする火の霊が金属の表面を磨き、神殿の床の塵を灼いています。眠りについた古き神々の来臨も絶えた空虚な神殿の塔の最上階には、生け贄の獣をまるごと焼けるような坩堝を模した祭壇があり、闇のなかで乾いた熱気とかすかな光を放っています。その上を覗き込めば、赤く燃える気体が激烈な炎の舌を放っているのが見えるでしょう。それは硫黄の精気、錬金術の3原理のうち最も苛烈な力です。全てを焼き尽くす炎であり、灼かれた素材でもある硫黄のゆらめく光は、永遠に創造し続ける神の真理を表しています。

(しばしの沈黙・・・)

振り向くことなく背中の方角に意識を向けて下さい。あなたの背後には、測りしれぬ暗黒の深淵が広がっており、あなたの背骨を冷やかな湿ったものが触れている。人間に限られた心において、背後の空間は神秘な潜む方角、いつかは訪れる死が待つ場所でもありません。後ろの凝集した闇のなかには、終わることのない水の面がひろがり、その底知れぬ深みには海龍の骨を組んだ神殿が海中を漂っています。無数の貝殻や海草で覆われて元の形さえ覚えていません。そのぬるぬるとした骨組みの中心には、ピンク色の珊瑚で床を敷き詰めた広間があり、巨大な二枚貝が天蓋つきの祭壇として据えられています。成長した種目鮫を一呑みにできそうな巨大な貝のなかには、かすかに動く生きた貝柱とやわらかな肉の舌がうごめいており、その重なり合った貝の肉布団の奥には真珠のかわりに銀色の重い液体が闇のなかで輝いています。ひとつときも安定せず、揺れ動く金属の液体は水銀の精髓、錬金術の3原理のうち、変化する物質の性質を示しています。それ故に、メルクリウスの霊は神の生命を表し、人間においては生命力の核であり、同時に荒々しい無意識の深みそのものでもあります。暗く冷たい深海の重みと、その膨大な水の塊の奥底で、変転する水銀の輝きを見つめて下さい。

(しばしの沈黙・・・)

再び意識を正面の海に戻して下さい。そして、海から吹く暖かい風を感じて下さい。それは、あなたの全身をやわらかく撫でていきます。全てを覆い隠す夜のやさしさを風のなかに感じて下さい。あなたの左、右、そして後ろには超越的な錬金術の3原理が、元素霊にかしずかれて存在しました。しかし、あなたの前にひろがるのは人間を拒絶しない自然の風景、暖かな夜のまどろみのなかに抱かれた海と空の調和の情景です。

そして、この目覚める直前の夢にも似たおぼろな光景にも変化が生じます。あなたの心の目の前で、空と海を分ける水平線がはっきりと見えるようになってきました。夜空の星が瞬き始め、東の空が徐々に明るく、白み始めます。闇が勢いを失い灰色のモノトーンな世界に、そして幾重にも染め上げた版画のように、色が徐々に鮮明になり、灰色がかった黒から、群青色に、紺色から碧に、そして青から水色にと段々と変化していきます。今や夜の時刻が終わろうとしています。それと同時に東の水平線上に絹糸を流したような雲が幾筋もあらわれ、その一筋一筋の雲の下半分が白く浮き上がってきます。

もはや水平線は空と海の間を区切る明瞭な直線です。白々とした空の下に青みを帯びた暗い海の表面が細波を走らせて何かを期待するかのようになっています。風が光を運んできました。強い上空の風に追い立てられ、東の空から雲の帯が次々と流れてきます。

水平線が黒い筋から白い線に、そしてその中央がかすかな赤みを帯びてきました。赤い水平線はすぐに黄金色の輝きに変化していきます。水の上に現れた変化は空をも塗り替えます。東の雲の帯は下半分が黄金色に燃え上がり、上半分が灰色に織りあげられた2色の糸のようです。

ついに東の水平線は目映く燃え上がり、中央が膨らみ始めました。太陽の出現する直前の微妙な変化が、薄明の空を《黄金の夜明け》の放射状の光の矢で飾ります。太陽の出現する方角の海は赤と群青の斑の帯で染め上げられ、太陽の道をまっすぐにあなたの方に伸ばしてきます。風に煽られた海が波立ち、ざわめき始めます。

風がかすかな音楽を運んできました。聞いたこともないリズムで、人間の言葉とは違いますが歌声のようです。空と海が太陽神の光臨を喜んで、賛美歌を歌っているのです。そして目に見えない崇拜者の歌声に迎えられて、御来光が走り出しました。

世界が躍動します。爆発的な光が乱舞し、強烈な力の塊が黄金の光輪となって出現しました。一瞬にして、闇が拭い去られ、世界は水平線の上にゆっくりと姿を現した天の火の源の支配下におかれました。太陽の熱と光があなたの全身を貫き、細胞のひとつひとつに至るまで揺り動かし、活性化します。光が肉体の暗く重い部分を溶かしていきます。あなたの肉体を満たす、純粋な喜びを味わいなさい。前方から降り注ぐ光は、やわらかな風と一体化してあなたの肉体に錬金術的な変化を与えていきます。今より夜は終わり、永遠の朝が始まります。

(しばしの沈黙・・・)

静かに目を開けて下さい。イメージの旅は終わりました。」

H t : 「ヘルメスの技は成就し、黄金がもたらされた。」

H t は説法を行う。

(春分点の意味：タットワの潮が、《破壊の潮》から《種蒔きの潮》に切り替わる。

黄金の夜明けの図版の意味：ゲブラーの真紅、ゲドゥラーの青、イエソドの紫の三角形

剣を持つ騎乗の戦神と笏を持つ王座の神、剣と笏を併せ持ちコクマーの棒となし、ピナーの

杯で受けること。3 原理と 4 元素の融和。等々・・・)

P t : 「春分点は通過せり。・・・聖餐をともにせん。」

(注: 特別な儀式を行う場合は、この部分で行う。繋ぎ方は以下のとおり。

P t の「春分点は通過せり。・・・をせんがため、・・・の儀式が執り行われる。」
・・・《儀式実施》・・・

P t の「・・・儀式は、終了せり、聖餐をともにせん。」)

H t は祭壇の西に立ち、赤灯に手をかざす。

H t : 「ヨド」

H t は杯のワインを飲む。

H t : 「ヘー」

H t は薔薇を取り上げ香を嗅ぐ。

H t : 「ヴァウ」

H t はパンに塩をまぶして食う。

H t : 「ヘー」

H t は再度、薔薇を取り上げて言う。

H t : 「ヘゲモンよ。われ汝を招く。

われとともにこの薔薇の香を《風》の象徴として嗅ぐべし。」

H g は祭壇の東に立ち薔薇の香を嗅ぐ。次に H t は H g の手を取り赤灯に手をかざさせる。

H t : 「われとともに、この神聖なる《火》の温かさを感じるべし。」

H t はパンを塩にまぶして与え、

H t : 「われとともに《地》の象徴として、このパンと塩を食すべし」

H t は盃を取って与え、

H t : 「されば最後に、元素の《水》の聖別されし紋章として、

われとともにこの葡萄酒を飲むべし」

H g は退き、H t は祭壇の東に回り、南に面する。D d が進み出る。以後、同じプロセスで H r と S t に四大の象徴たる聖餐を与え、その後 K x、そして四聖獣の守護者、参列者と進み、全員が聖餐を受け終わったら、P t が進み出て最後に食す。H t は祭壇の東から宣言する。

H t : 「われらが食せしものにより、われらに光と闇を分かち与えたまえ。
宇宙の主を讃えん。」

P t : 「参列者は、立って東の方角を向いて下さい。

ハイエロファントの動作に従い、同じ言葉で礼拝して下さい。」

H t : 「聖なるかな、汝、宇宙の主よ！」

(ホルスのサイン)

A M : 「聖なるかな、汝、宇宙の主よ！」

(ホルスのサイン)

H t : 「聖なるかな、汝、自然の造らざる者よ！」

(ホルスのサインを継続)

A M : 「聖なるかな、汝、自然の造らざる者よ！」

(ホルスのサインを継続)

H t : 「聖なるかな、汝、広大にして強大なる者よ！」

(ホルスのサインを継続)

A M : 「聖なるかな、汝、広大にして強大なる者よ！」

(ホルスのサインを継続)

H t : 「光と闇の主よ！」

(ハーボクラテスのサイン)

A M : 「光と闇の主よ！」

(ハーボクラテスのサイン)

第4章 神殿の閉鎖

H t : 「ヘカス ヘカス エステ ベベロイ。I O S アドヴェンナ・ロッジの兄弟姉妹たちよ。ロッジの神殿を閉鎖するわれを助けよ。」

P t : 「水と火の浄化」

H t : 「ストリステスよ、神殿を水で浄化せよ。」

S t が最初と同じ手順で浄化し、告げる。

S t : 「神殿を水で浄化した。」

H t : 「ダドウコスよ、神殿を火で聖別せよ。」

D d が最初と同じ手順で聖別し、告げる。

D d : 「神殿を火で聖別した。」

P t : 「諸神への賛辞」

H t : 「宇宙を領したまう《三重に偉大なる神》に感謝せん。
輝ける驚、R A - H R V - K T H I よ、時空の彼方に戻りたまえ。」

S t : 「均衡を領したまう《双子の女神》に感謝せん。
大地の貴婦人、N B T - H T I よ、霊の虚の場所に戻りたまえ。」

H r : 「魔術を制したまう《黒き女神》に感謝せん。
海の貴婦人、A S T h - R N N V T h よ、霊の虚の場所に戻りたまえ。」

D d : 「苦き知恵を制したまう《灼熱の試練を下す神》に感謝せん。
虚空の領主、A P V - P R S h よ、霊の虚の場所に戻りたまえ。」

H g : 「神殿を領したまう《死して再び蘇る神》に感謝せん。
黄泉の領主、A S R - V N - N P R よ、霊の虚の場所に戻りたまえ。」

H t : 「神秘なる逆周行を光と闇の小径に起こすべし。」

P t : 「竜の逆周行。
この神秘なる《竜の逆周行》により、祭壇を軸として上下に絡み合った光と闇の二重螺旋が分離し、光の渦は上方に、闇の渦は下方に去って行く。」

H g が最初に左回りに動き始める。S t、H r、D d が追う。
神殿の東を通過するとき《ホルスのサイン》を円周上になし、H g は1回、S t は2回、H r とD d は3回通過した後、自分の場に戻る。

H t : 「神秘なる逆周行は完成し、天の竜は上昇せり。されば《宇宙の主》を讃えん。」

P t : 「参列者は、立って東の方角を向いて下さい。
ハイエロファントの動作に従い、同じ言葉で礼拝して下さい。」

H t : 「聖なるかな、汝、宇宙の主よ！」	(ホルスのサイン)
A M : 「聖なるかな、汝、宇宙の主よ！」	(ホルスのサイン)
H t : 「聖なるかな、汝、自然の造らざる者よ！」	(ホルスのサインを継続)
A M : 「聖なるかな、汝、自然の造らざる者よ！」	(ホルスのサインを継続)
H t : 「聖なるかな、汝、広大にして強大なる者よ！」	(ホルスのサインを継続)
A M : 「聖なるかな、汝、広大にして強大なる者よ！」	(ホルスのサインを継続)
H t : 「光と闇の主よ！」	(ハーボクラテスのサイン)
A M : 「光と闇の主よ！」	(ハーボクラテスのサイン)

P t : 「四門の閉鎖」

H t は、祭壇の南に廻り S t に命ずる。
H t : 「ストリステスよ、神殿の北壁を解放し、地の門を閉じよ。」

S t は塩皿をもち、北東に行き、反時計廻りに神殿の北の壁沿いにそれを水平に走らす。
再び、北の中央に戻り、皿でそれぞれの五芒星とサインを描く。

S t : 「N A N T A」「A G L A」
霊の均衡受動の追儼の五芒星を描き霊のサインを入れる。

S t : 「E M O R D I A L H E C T E G A」「A D N I」
地の追儼の五芒星を描き、中央に金牛宮のサインを入れる。

S t は祭壇の北に戻り H t に告げた後、皿の塩をひとつまみ口に入れ祭壇に戻す。
S t : 「神殿の北壁を解放し、地の門を閉じた。」

H t は、S t の返事を確認した後、祭壇の東に廻り H r に命ずる。
H t : 「ハイレイアよ、神殿の西壁を解放し、水の門を閉じよ。」

H r は祭壇から盃を取り、北西に行き、反時計廻りに神殿の西の壁沿いにそれを水平に走らす。再び、西の中央に戻り、それぞれの五芒星とサインを描く。

H r : 「H C O M A」「A G L A」
霊の均衡受動の追儼の五芒星を描き霊のサインを入れる。

H r : 「E M P E H A R S E L G A I O L」「A L」
水の追儼の五芒星を描き、中央に天蠟宮のサインを入れる。

H r は祭壇の西に戻り H t に告げた後、盃からひとくち飲み祭壇に戻す。
H r : 「神殿の西壁を解放し、水の門を閉じた。」

H t は、H r の返事を確認した後、祭壇の北に廻り D d に命ずる。
H t : 「ダドウコスよ、神殿の南壁を解放し、火の門を閉じよ。」

D d は祭壇から杖（剣）を取り、南西に行き、反時計廻りに神殿の南の壁沿いにそれを水平に走らす。再び、南の中央に戻り、それぞれの五芒星とサインを描く。

D d : 「B I T O M」「A H I H」
霊の均衡能動の追儼の五芒星を描き霊のサインを入れる。

D d : 「O I P T E A A P E D O C E」「A L H I M」
火の追儼の五芒星を描き、中央に獅子宮のサインを入れる。

D d は祭壇の南に戻り H t に告げた後、杖（剣）を額に押し当て祭壇に戻す。
D d : 「神殿の南壁を解放し、火の門を閉じた。」

H t は、D d の返事を確認した後、祭壇の西に廻り H g に命ずる。
H t : 「ヘゲモンよ、神殿の東壁を解放し、風の門を閉じよ。」

H g は剣をもち、南東に行き、反時計廻りに神殿の東の壁沿いにそれを水平に走らす。
再び、東の中央に戻り、剣でそれぞれの五芒星とサインを描く。

H g : 「E X A R P」「A H I H」
霊の均衡能動の追儼の五芒星を描き霊のサインを入れる。

H g : 「O R O I B A H A O Z P I」「I H V H」
風の追儼の五芒星を描き、中央に宝瓶宮のサインを入れる。
H g は祭壇の東に行き、H t に告げた後、剣を額に押し当てる。
H g : 「神殿の東壁を解放し、風の門を閉じた。」

《しばしの沈黙》

H t : 「この儀式に参集されし、すべての神々、大天使、天使、長老たち、
この儀式に言及されし、すべての惑星霊、ダイモーン、四大の生き物たちよ。
汝らの助力に感謝せん。平安のうちに元の場所に戻られよ。
I H S h V H と I H V S h H の御名において、
この儀式により拘束されし、すべての《霊》を解放せん。」

H t は祭壇に向き直る。

P t : 「参加者は、祭壇の方を向いてお立ち下さい。」
全員が祭壇を向く。

H t : 「われは宣言する。地上の神殿は閉鎖せり。」

H t は《ヴェールを閉じる》サインを行う。そのサインが手を合わせて静止した瞬間、唱和する。

A M : 「地上の神殿は閉鎖せり。アーメン。」

P t : 「参加者退出」

S t が先頭に逆周行を開始する。H r、D d、H g、四聖獣の守護者、東の参加者、南の参加者、西の参加者、北の参加者の順でその後を追ひ作業場を出る。最後に残ったH t は、小六芒星及び小五芒星の追儼儀式を行い、最後に退出する。

もし、神殿の魔術的磁気作用が残存しているようであれば、所要の大儀礼を用いて、完全に追儼する。

法衣を着用している場合は沈黙のうちに着替える。

普段着に戻り、儀式についての個人的メモ（『魔法日記』用）を終わるまで、この沈黙を続けるのが望ましい。その後は、軽い食事、飲み物等を探り、談笑し、地上に帰還したことを自分自身に印象づけること。

VERBORUM PUBLICA
I O S
RITUALE DE
AEQUINOCTIO VERO

IMPRIMI POTES: I O S
NIHIL OBSTAT QUOMINUS IMPRIMATUR
IMPRIMATUR : M.E.S.A. 5=6
MARTIUS MMI

春分儀式

Copyrights(C) All rights reserved I O S 2001
2001年3月10日 I O S 発行

本文書は、複数のまたは個人の会員が、魔術実践の練習のために使用するものであり、I O S の公式儀式手順書ではない。従って、本儀式を公に実施するテンプル、ロッジはその旨を会員に明確に告示する必要がある。しかし、それは同時に本文書を利用した会員の自由な実践活動を妨げるものではない。会員外の使用については、I O S の許可が必要である。本文書の著作権は団に所属する。本文書の内容の一部または全部を、団の文書による許可なく、機械的、電子的、光学的、霊的、その他の手段で複製、引用、転写することを禁じる。